

音屋夫人

武田繁太郎



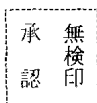
芦屋夫人

武田繁太郎

東京文芸社

芦屋夫人

五五〇円



0093-733104-5170

昭和四十八年五月五日印刷
昭和四十八年五月十日發行

著作者 武田繁太郎

発行者 角谷奈良雄

発行者 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三一二六
出張所 東京都新宿区払方町一番地
振替・東京二一七五七
電話・(三〇)二五五〇

芦屋夫人

目次

春の傷み

五

夏の嵐

一四

秋の果て

一五

装幀 玉井ヒロテル

春の傷み

1

県一（県立第一）高女前から輪田真紀子と女中のキヨとを乗せた市電が、五つ六つさきの大倉山公園の停留所を発車したときである。真紀子の姿が、つきそっているキヨの目のまえからふいに消えていた。

電車はかなり混んでいた。それまでキヨは車掌台のすぐわきに真紀子と並んで立っていた。だが、あとから乗りこんでくる客の群れにキヨ一人が車内へおしこまれていった。

ちょうど学校の退け時である午後の三時をすぎたこの時刻は、いつもこんなふうに混みあっていた。キヨは真紀子と離ればなれになったことにはさして気もとめず、真紀子の通学カバンをかかえたままぼんやり天井の吊広告などをながめていた。だが、なにげなく車掌台のあたりへ視線をおとすと、そこには、真紀子の姿がなかった。

たったいま、大倉山へくるまでは、たしかにいたはずである。背の低いキヨは爪先だちになって、乗客の肩越しにあたりをながめまわした。真紀子とおなじ女学生姿なら幾人も目についた。しかし、肝心の真紀子はやはりどこにも見当たらなかった。

電車はもう動きだしている。キヨはあわてて車外を見た。するとキヨの目に、電車や自動車の往きかう車道を小走りに横切つてゆく真紀子らしい後ろ姿が認められた。

キヨは思わず、「あっ」と小さく叫び、乗客をかきわけて車掌のそばへ行こうとした。だが、そのとき電車はもう急カーブに車輪をきしませながらぐんぐんスピードをあげていた。

真紀子は、広い車道を夢中で駆けていった。彼女が反対側の歩道へたどりついたとたん、背後を鋭い警笛をひびかせたトラックが地ひびきをたてて通りすぎていった。ふとい罵声が運転台からとんだ。真紀子は足がふるえ息がつまりそうになった。だが、ここで立ちどまるのは危険だった。さつきキヨが電車のなかから大声で自分の名を叫んだのを真紀子は聞いたように思う。キヨに気づかれたにちがいがなかった。はやくこの場から遠ざからねばならない。真紀子は胸を突く動悸をおししずめながら、なおも小走りに歩をはやめた。

しかし、彼女にはどこへ行こうという当てがあつたわけではなかった。行先を考える余裕などありはしなかったのだ。ともかく、いま電車を捨てたのが偶然大倉山公園の前だったことは好都合であつた。彼女の足は誘われるように公園の入口にむかつていた。

大倉山公園は電車道から百メートルほどおくまった小高い丘のうえにあつた。その下まできたとき、真紀子はようやくほっと蘇生したように歩度をおとした。そうしてゆっくりと丘の坂道をのぼっていった。高鳴っていた動悸もしだいにおさまってきた。彼女は大きく深呼吸吸した。

新緑の季節であつた。頭上をおおう並木の葉桜が坂道いっぱいに明かるい緑のひかりをみなぎらせていた。そのみどりに全身を染めながら、真紀子は、はじめて一人きりになれた解放感に胸をはずませた。

公園にはいると、彼女はあたりかまわず歩きまわつた。綱を放たれた若駒のように彼女の脚はかるやかだった。一人歩きにうきうきと心が躍るのである。むろん、この小さな逃避行はその場かぎりの

原书缺页

原书缺页

原书缺页

原书缺页

る相手には一顧も与えず、ことさら表情をつめたくひきしめたまま眼下の港のあたりをながめやつた。

このベンチは、こんもりと茂った紫陽花の植込みが並んでいるちようと陰になっていた。真紀子が大声でもあげぬかぎり、なにをされようと背後の通行人からは気づかれそうになかった。だが、相手がこれ以上なにか不埒な真似でもすれば、そのときは平手打ちのひとつも浴びせて逃げだせばいいと、真紀子は油断なく身がまえていた。

S商生は、そうした真紀子のとり澄ました様子を、しばらくにやにや笑いながらながめていたようだが、やがてあたりの気配をうかがうと、

「君、だれか待ってるの」
と、ささやきかけてきた。

真紀子は返事を与えなかった。彼女にはもうこの不良中学生を恐れるよりも輕蔑するほどの気持の余裕をとりもどすことができていた。そうしてずうずうしく言いよってくる相手を逆にからかってやりたくなった。

「あんた、どこの学校？」

彼女は故意にとぼけてみせてから、ゆっくりと相手の姿をながめまわした。

この問いは、意地わるかった。それまで相手の顔に浮かんでいた薄笑いに、きゆうに卑屈な歪みがまざった。少年は伏目になって真紀子の制服を見た。セーラー服の襟の線と胸のバッジとで学校名はすぐ判別できた。女学生でも真紀子は秀才ぞろいの県一であり、相手は最劣等のS商である。

「あんた、S商とちがうの」

真紀子が、だめをおすように言った。

「ふん、そうや。S商や」

相手は追いつめられたように小声で答えた。

この短い問答で、それまでの応対は逆転した。こんどは真紀子の顔に薄笑いが浮かんた。

「あんたこそ、こんなところへなにしにきたの」

「なに言うて、べつに用ないのや。ちょっと散歩や。君も、そうか」

それには答えず、真紀子は相手の上着の襟章のVのマークを見ながら言った。

「散歩て、あんたのおうち、この辺？」

「うん、元町や」

「そう、元町の、どこ？ なんぞお店？」

「ふん、わいとこ、しんちくや」

「ほ才、あんた、神蓄の息子さん？」

そのお店なら真紀子もよく知っていた。元町一丁目に三階建の店舗をかまえた有名な蓄音器店である。輪田家でも、レコードはこの店からとっていた。

「なんや、ほんなら、うちは、あんたのお店のお得意さんよ。いつも、横―なんかいう若い店員さんがレコードとどけにくるわ」

「ああ、横山か。そうか、君んところ、うちのレコードいれてもうとんやったら、こら、お礼言わんとあかんやア。へえ、毎度おおけに」

相手はきゅうにうちとけた表情になった。

「こんどからほしいレコードあったら、直接わいに言うたらええ。二割引きたるで」

「ふむ、そのときは頼むわ。けど、あんた、なんて名前？ それ聞いとかとあかんやないの」

「ああ、そうやったなア。わい、野口純一や。君は？」

「あたし——？」

あとは含み笑いに流したまま、真紀子は、足元の小石を蹴りながら眼下の街に視線を投げた。

丘の下の方筋から、そうぞうしいラッパ鼓隊の行進曲が聞こえてきた。「祝出征」の幟をかざし響がけの軍服姿を先頭にした一団が、そろそろと神戸駅の方角をめざしていた。満州事変、上海事変と大陸に戦火がひろがってからも数年たった。こうした出征兵の見送りは、千人針をもとめる婦人たちの姿とともに毎日どこかの街筋でかならず見うけられる光景になっていた。真紀子の視線に誘われたように野口も出征兵の一団を見おろした。だが、なんの興味もなさそうにすぐ面をあげると、真紀子になにか話しかけようとした。

そのとき、紫陽花の植込みのむこうから、「お嬢さん」と叫ぶキヨの声が駆けよってきた。

キヨはベンチのまえに立ちはだかると、ひどく肩を波だたせながらしばらくはものも言えぬふうだった。真紀子の「逃避行」がいま彼女と並んでベンチに腰かけているこの中学生と「あいびき」するためだったとは、キヨにとってはゆめにも考えられぬ驚きだったにちがいない。キヨは気ぜわしく二人を見くらべた。それにしても真紀子はいっこの中学生と待ちあわせる約束などしたのだろうか。いったいどこで知りあったのか。キヨの表情から読みとれるそうした勘ぐりに、真紀子が思わずいたずらっぽい微笑をかえすと、キヨははじめて口がきけた。

「お嬢さん、ほんまに殺生だっせ」

「けど、ここにるのがようわかったわね」

キヨはぐくりと生睡をのみこんだ。彼女は大倉山の停留所で真紀子らしい後ろ姿を見つけてから、つぎの楠公前で電車をとびおると、真直ぐにここへひきかえしてきた。真紀子が公園へいったにち

がないと見当をつけてきたのだが、植込みに邪魔されて、このベンチを捜しあてるまで公園じゅうをなんど歩きまわったかしれぬという。キヨは堅ぶとりの両頬を真赤にほてらせていた。

「こんなこと、もしや旦那さまに知れたら、どないしますのや」

真紀子が叱られるというのか、つきそっていた自分の落度になるというのか、キヨはせきこんで言ったが、その狼狽ぶりがかえって真紀子にいたずらっぽい反抗心をそそらせた。

「そんなこと、なんでもあらへん。あんたもあたしも、黙ってたらええやないの」
「けど、そうおっしゃったかて——」

キヨはうさんくさい目で真紀子と並んでいる野口を見すえた。彼はさっきからなにくわぬ顔でそばをむいていた。

「さア、お嬢さん、とにかく早う帰りまほ。だんだん遅うなってしまうがな」

そう言つて、真紀子の手をとるようにしてキヨがせきたてたとき、真紀子はふと小さな企みを思いついた。

「そんなにせかんでも帰る。けど、まだこの人に話が残ってるさかい、あんた、むこうへ行つて」

キヨを植込みのそとへ追いやると、

「ちょっと、野口さん」

と、相手の名をささやいた。

「ええ？」

「あした、もういっぺん逢お」

「いこで？」